



突然の胸痛と冷汗に見舞われた40歳の男性が救急外来を受診しました。診断は急性心筋梗塞。すぐさまカテーテル治療を受けて危機を脱しました。カルテを調べると、この患者は1年前にカテーテル検査を受けており、心筋梗塞を起こした部位にはまったく狭窄は認められず、正常な冠動脈と診断されていました。

6月、米国食品医薬品局（FDA）は、心臓疾患のリスクを高めるとされるトランス脂肪酸（ショートニングやマーガリン、菓子やパンに含まれる）を今後3年かけ、加工食品に使用禁止としていくと発表しました。この施策によって、2万件の心筋梗塞が予防され、7000人の命が救われると主張しています。

急性心筋梗塞

循環器内科医



上野勝己氏

心筋梗塞は命に関わる病気です。約半数が発症から1時間以内に死亡するといわれています。原因は冠動脈の完全閉塞ですが、どの

検査は正常、突然閉塞

ようにして閉塞するのでしようか。

心筋梗塞を発症する半年から1年前にカテーテル検査を受けていた、患者の発症場所の狭窄度を調べた厚生労働省研究班の報告では、確認できた病変の狭窄度は6割弱の患者で正常から軽度狭窄でした。さらに90%の患者は、中等度狭窄以下の場所から心筋梗塞を発症していました。わずかな狭窄しかない場所が突然

に閉塞するのです。狭窄度が75%以上の高度狭窄を治療しても、全体の1割程度の患者しか救うことができないのです。

閉塞のメカニズムは、冠動脈の内側にこびりついたプラークが、熟れたザクロが破れるように破裂し、血栓ができることによります。カテーテル検査やCT（コンピュータ断層撮影）

検査で、軽度狭窄や中等度狭窄で問題ないと判断された場所から、多くの心筋梗塞が発症していることになります。では、どうしたらプラークの破裂を防ぐことができるのでしょうか。

プラーク形成のメカニズムは、血液中のLDL（悪玉コレステロール）が動脈の壁に入って酸化される（酸化LDL）と、壁の中

〈心筋梗塞患者の冠動脈〉



1年前にはほぼ正常の部位（左矢印） 急に閉塞して（右矢印）心筋梗塞を起こした

に蓄積されて血管壁が硬く分厚くなつていくと考えられています。生体内では活性酸素が酸化の主役です。活性酸素はストレス、過激な運動、偏った食事、喫煙、排気ガスなどで増えるといわれています。さらに現代社会の環境そのものが活性酸素、酸化

食事でプラーク破裂防止を

LDLの生成の原因と言えるでしょう。

5歳未満の子供でも8割にプラークを認めたという報告があり、プラークの形成は生まれた時から始まるともいわれています。したがって、プラークができることを恐れるのではなく、破裂しやすい不安定な状態にしない、成長させないようにつづけることが現実的です。

そのために有効なのが禁煙と食事療法、運動療法です。望む通りの成果が出るかは不明ですが、冒頭の米国の試みもその一つです。日本人のトランス脂肪酸の摂取量は、WHO（世界保健機関）の基準をクリアしていますが、逆に飽和脂肪酸（肉や乳製品）の摂取量の増加が指摘されています。不飽和脂肪酸（植物油）もやはり過剰摂取が指摘されています。脂質の種類に関わらず適切な量を摂取することが大切です。（松波総合病院心臓疾患センター長、羽島郡笠松町田代）